

「私の被爆体験 永井隆博士とともに」

永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター
名誉センター長 久松シソノ



只今ご紹介をいただきましてどうも有り難うございます。このような機会を与えていただきましたことに、まずもって感謝を申し上げます。十分なことができますかどうか、一生懸命60年前を思い出して、皆様方に二度とこのようなことがないようにということをお話をさせていただきたいと思えます。

永井隆先生が昭和15年に兵隊から復員して来られました。そして永井隆先生は「これから戦争に行かなくてもいい。文部省のほうから物理的療法科、今の放射線科ですけれども物理的療法科の立ち上げにあたるようになっておりました。そのときに私は昭和14年に養成所に入りました。そして永井隆先生のご講義を受けたり、そこに実習にまいりまして、いろいろご指導をうけておりました。昭和16年の卒業の時に物理的療法科の婦長が退職をいたしました。ところが思いがけず、私に是非来いというような要請がございました。私は子供が好きで小児科で主任をやっておりました。それで病室もないし、これからのところというし、絶対に行かないと心で決めましたけれども、どうしてもお断りに行くのが億劫でございました。もう一週間も経ちましたので、これは是非お会いしてと思ひまして、勤務を終えてから、先生の教室をお訪ね致しました。そうしますと先生は受付の所におられたんです。とたんに先生は「あっ、久松婦長が見えた。みんな集まれ、婦長さんの歓迎会をする」というようなことで、レントゲンのあの暗室の中にみんな教室職員を入れられて、そして先生は三刀屋町といって、島根県のお

生まれですから、どじょうすくいを一生懸命もう、みるみるうちに準備をして「エッサッサ、エッサッサ」と。教室員と私は見物人になって一生懸命それを「ワッハッハ」言いながら笑っておりました。この先生とならもう楽しく仕事ができるとびーんとそこできまして、お断りに行ったものが、よろしく願いますということの出会いでございました。

先生は二度も戦争に行っておられたものですから、組織ということを非常に大切にして仕事しやすいんです。自分に与えられた役割を、勤めを十分していったならば何にもおっしやりません。そのかわり、もう配電盤に機械に携わっているときに、そのレントゲン技師とか看護婦などが私語をします。私語をするとどこから見ておられるのでしょうか、もうあの昔の小学校のような長い木造の建物でしたが、先生は「こらあー」と言って怒られます。そういうふうな先生でしたけれども、職場では一度も私は怒られたことはありませんでした。「婦長さん、婦長さん」と言ってくださるから、みんなが「婦長さん、婦長さん」その当時は教室はこれからという時でしたから、教授の席もありませんし、婦長になりますと、任官制でしたけれども、その任官のあれもございませんでしたので、院内操作で、婦長職たつという辞令をいただいたわけです。そういうことで勤務中にですね、永井隆先生はいつも朝は朝礼といって8時半に「集合」と言ってみんな集まります。今日一日の教室の予定をちゃんと話されまして、そしてまた、終礼といって、5時ですね、5時になると、どこに

おられてもまた、教室に戻って来られまして、今日の仕事の結果がどうだった、明日の予定はこうだ、だんだん戦争が始まった時には、その戦況などもお話をしてくださっておりました。先生は本当に言われることと、実行がひとつも、一貫して変わらないんですね。ほんとにそして愉快的な先生でした。ユーモラスでご自分はすまして人を笑わせる。そういう先生に私はほんとに、ああよかった。永井先生とお仕事をするのはほんとにああよかったと。この出会いをかみしめて仕事をしたことでした。

だんだんだんだん、昭和16年12月8日戦争が勃発しました。医局でも他の医局でも「やったやった」と言ってみんな大騒ぎでした。それからだんだんだんだんひどくなります。もうレントゲンの教室も木造でした。みんな病院は鉄筋コンクリートの建物でしたけれども、レントゲンだけは昔の木造の、耳鼻科の隣にあったんですけども。これも本省の指導で、疎開をするようにと言われてまして、本館の2階と、それからその次の2棟目の内科病棟の3階建ての1階ですね、地階とそれを呼んでいますけど。地階に私の部屋を頂きました。そういう所にいたわけです。そして先生は「この戦争は是非勝たなければいけない。日本国のために、陛下のために」もう口癖のように言われて、お時間があれば地域の婦人部の竹槍を指導したり、肝試しと言って「婦長さん頼む」と言われ、なんだろうかと思ったら、はじめは手術部で手術をした時の血液を頼んでおくわけです。こうこうして明日要りますのでお願いします。いっぱい血が付いたものすごい、看護婦でも臭気に、臭いで悩ませるような血の付いたガーゼをですね、その部屋に散らかすんです。そしてクリスマスの時にするように赤い火、青い火、ぴかぴかぴか。人間の骸骨をまたそこへ置いて、地域の婦人の皆さんを部屋を真っ暗くして、一番端からそして出口まで通らせるんです。そして先生は入り口に居られてですね。入り口明るいんですね。私もそこへおるんですけども。もうみんな脂汗かいてふらふらして、やっと辿り着いてみえると「このへなちょこが。そ

んな態度では戦争には勝てんぞ」と、こうおっしゃるんですね。そして今度わたしの方を見て、にやーとなさるわけです。そういうことをずっとしておられました。

永井隆先生はこれも本省の仰せで、身体検査、胸部の結核の検診をするようになっておりました。レントゲンのお仕事をしながら、お昼からは30名、また明日も30名、50名というふうに、だんだんだんだん、もう戦争に何でも現像液でもフィルムでも取られてしまって。先生は、肺のこの間接撮影をする、あの配電盤に直接胸をつけまして診断を下される。それがたたりまして、その放射能ですね、白血病・血液の癌になってしまい、今の朝長先生のお父様が主治医でね、そしてその上影浦先生でまた、内科の先生でした、もう余命3年というふうに、その原爆が落ちる前に2ヶ月前に診断を下されました。全然それを私に教えてもくださらなければ、今までとひとつも変わらない活動を、先生はご自分でしておられました。その当時お薬もなくて、ホーレル水という水薬があったんですけども。それをお昼に医局にお弁当の横に置いておきますけど、もうお昼ご飯も忘れて食べられないというようなことも、月のうちには何回かございました。ですからお薬も飲んでおられない。「先生、お薬だけは飲んでください。お昼だけは食べてくださいよ」そんなふうに、私もあの大変横着な態度ですけど、意見を申し上げておりました。

さあ、だんだんだんだん、戦争がひどくなってきました。毎日のようにもうほんとに爆音はするし、これから長崎医科大学にもこの防火の部隊を作ってですね、永井隆先生は隊長になられて、このまえ「大波止に落ちた」と言ってそこへ出動するんですね。鉄兜かぶって、こうして武装して行くんですね。ところが直撃弾がですね、長崎医科大学附属病院にも落ちました。先程も小林先生からご説明がございましたから、もう詳しくはやめますけれども、そこで学生が3名ほど犠牲が出ました。病院ではもう重症の患者さんだけ病院に残っていただいて、あとはおうちにそれぞれ帰って

もらうことになりました。

そしてだんだんひどくなってきて、8月6日には広島に爆弾がおとされたですね。原子爆弾とそのときもみんな知らない、日本政府も知らせてくれない、新聞の片隅にですね、広島に大型爆弾落つとか、新型爆弾とかという言葉を使っておりました。被害は僅少なりと片隅に少し新聞にでました。そのときわたくしどもは毎月8日の日は大詔奉戴日と言って、その当時の角尾学長から訓話をいただいていた。大学の職員が全部、その運動場、今、浦上の教会がございます。その手前が大学の運動場ですが、そこに集まって学長の訓話を受けるわけです。学長は所用で上京の途中、その広島の大変な原爆、あの大型爆弾の後、惨状を歩いたり、バスのようなものに乗ったりして、ようやくその大詔奉戴日に、ご自宅にも寄らないでまっすぐ来られて、間に合われたわけです。そして学長のお話がございました。「広島は大変、そのうちに長崎医科大学にも爆弾が落とされるでしょう」ということで。まあ、出会いとか運命とかということ、私はもういろんな場面をかみしめて体験してまいりました。今まで小林先生のお話にもございましたが、学生を早く仮卒業させて、戦地に送ろうというような計画で、夏休みを返上して一生懸命働いておられた。ほんとにその日がやってきました。

永井隆先生は本館の2階におられた。当時の角尾学長はその廊下を隔てて、内科の診察日でしたので、そのご診察中に被爆をされたわけです。そのときには毎日その教室で先生が訓話をしてくださっておりました。戦場のお話もさあ、勝った、負けた、どこまで進んだということも詳しく。原爆の時はですね、永井隆教室はあのみんな本館の方に集まりました。私もこれは原爆と知らないものですから、患者さんにずっと手当てをしたり。それから疎開をしたレントゲンの材木が燃え出しましたので、そこに消火に行った。暇さえあれば、私どもは永井先生の指示で「何でも人を頼りにしちゃいかん。自分のことは自分でするんだ」と言われておりましたから。暇さえあれば、腹が減っ

ては戦ができない。食べるものもないんですね、よもぎとか、つわとかっていうのは穴弘法さんまで採りに行って、乾燥させて石油缶缶に入れておりました。先生が、昔のフィルムはよく燃えたんですが、天井も剥がして、そしてそこにつるして、そしてその消火をしなければいけないですけど。またその火を早く見つけなければいけない。その水槽も自分達で暇な時に、なみなみと水槽に水を貯め、それで消火をやるんです。そして爆弾が落とされんように、空襲警報になったら、防空壕に入るわけです。

ちょうど原爆の時はですね、警戒警報になったんです。朝早くから空襲警報があり、警戒警報になり、また空襲警報があり、そして警戒警報になり、警戒警報になったらみんながですね、それぞれ自分の職場につきます。そして肩の首からこうしているケープも取って鉄兜もとって、そういうふうな格好だったんです。何の前触れもなくって、その原子爆弾が落とされました。まだ原子爆弾で知りません。とっさに窓からもうフィルムが燃え出して火が吹き出しました。「先生逃げましょう」と私言ったんです。婦長としての責任を感じました。「はよ、逃げましょう」もう病院に火が燃え移りました。あの鉄筋コンクリート窓から、フィルムの燃えるのがものすごかったです。何と先生はおっしゃったでしょう。「一大事とは本日はたまたまのことなり」そして一内科の先生も少し手伝われましたけども。角尾学長も鉄筋コンクリートの2階に居られたのに、眼鏡は爆風ととばされる、そして硝子の破片で傷ついて、もう履いてる靴もどこいったかわからん。爆風ですね、物凄い爆風だった。

そして病院のすぐ上の芋畑に、みんな負傷者は歩ける人は歩く、肩を貸す、あるいは横抱きにしてあげる、おんぶする。そして角尾学長も教室員におんぶさせて、私どもと一緒に芋畑に着かれた。そうしますと永井隆先生は「角尾学長、こうこうしてみんな患者さんは負傷者は、今ここへ救出しよります」というようなことを報告。そして何をおっしゃるか「婦長さん、日の丸の旗を作れ」と

こうおっしゃる。どうして日の丸の旗を作ったらいいんだらう。私は先生にひとつひとつ教えられてやるんですが。「材料はいっぱいあるだらう」爆風で病院からシートが切れて飛んできてます。棒のようなものもあります。それに永井隆先生は先ほどのお話のように、右の側頭動脈が深一く複雑骨折をして。先生はこうして止めてるんです。ずーと止めながら活動なさるんですが、手を離せばピュッピュッピュッピュッ。台湾の先生やら私やらで、止血をするんですが、なかなか出来ません。深いとこ、モールのようにもうこの軍服に付いています。私は負傷に取り巻かれてじくじくじくじく、6人くらいの負傷者にすぐ取り巻かれましたから。あのじくじくして、それでこうして血をかくと、すぐ日の丸の旗ができます。またどうするんだらうかと思ったら、それを竹のような棒にして学長の所に立てさせるんです。「みんな大学本部はここだぞー。みんな集まれ」と言って、悲壮な声で言われる。そして学長に報告をされる。

私はちょうどその隣の地階に私の部屋をもらっておりました。爆風で水道の蛇口がジャージャージャージャー流れて、真っ暗く2分ぐらいなったんでしょうか、周囲が何にも見えなくなっていました。そして履いているズックも何もとばされています。音がするから、そこに行って、「婦長さーん」と看護婦が呼びますが、声がでないものですから。そこに行って、ゴロゴロと1、2回うがいをしました。そしてプルプルと2回ぐらい顔を洗いました。それが「婦長さんはえらいね、あんな時にうがいをしたり、顔を洗ったりした。あれが放射能を吸い込まなくて。あなたは今までいつもこうして元気におられる」と言って、如己堂に休んでいる時も誉めていただいておりますけども。私はそうしないと、もう声がでないんです、ごみがいっぱい詰まって。すーと明るくなったらどうでしょう、町はもう火の海です。木造ですからボンボンボン燃えて、稲佐山もものすごく燃え上がっておりました。

ずーと芋畑の方に入って行きました。翌日です

ね、この医学部の構内をずーと負傷者の手当てを先生としておったんです。その時に私は自分のあの弟と姉が、ちょうどあの漁港の当時、三重というところが私の実家ですけども、そこから心配して大学に尋ねてみえました。永井隆先生は玄関におられて「あー、婦長さんは元気で、もっと先の方で負傷者の手当てをしているから、こんな危険な所にどうして来たか、早う帰んなさい」と言って、私には取り付けてくださらないで、帰ってしまったそうです。後で聞きました。そして何か食べ物などをあの少し持って来たのは、僕が預かる、その話を後でして下さる。「婦長さん、おうちからこうこうして見えて、何かもらったけど僕が先に失敬した」とか。

そしてその構内をしている時、翌日ですね、私はビラを拾った。アメリカが落としたビラを。「日本国民に告ぐ。あなた達はこの戦争を早く終えるように。陛下に申し出なさい。そうでないと広島に落とした爆弾よりもっと強力な爆弾を落とす…」まだ下にもいっぱい続いております。これはあの原爆資料館にも本物がありますから、みなさん是非読んでください。そしてその先がずっと続いている、私、びっくりしました。「新型爆弾と呼んでいたのが、これが原子爆弾であったか」そばにおられた永井先生に、私は斜め読みをしてから、先生に「先生、大変です」と言ってお渡ししました。先生はまたサッと見られて、顔がもう真っ青になって、豆粒のような汗が滲み出て「あー、これが原子爆弾であったか」先生も放射能の専門家ですからね。「アメリカが原子爆弾の研究をしているということは知っておった。しかしこんなに早くに使えるまでになってるとは、知らなかったー」とそれだけおっしゃった。あの極限状況下でですね、先生はもう余命幾ばくもないと宣告を受けてるのに。その身体でほんとに気分が悪くなったら、その地べたに畑に休んで脈をみたり、心臓に手を当てたりする。お元気にすこし落ち着かれたら、また立ち上がってふらふらしながら指揮とっておられる。その先生が「アメリカはもう使えるまでになってたかー」残念そうに座り込ま

れる。全然呪わしい言葉はアメリカを呪うような言葉は吐かれませんが、それだけおっしゃったら座り込んでしまい、私は心配しました。先生がどうなるんだろう。これはもう先生がそのまま逝かれませんかしら、どうしよう。お傍を離れきらんでずーとついてました。

それからがまた大変です。さあ、ふらふらしながらようやく立ち上がられました。そして同じように指揮をとられるんです。薬専の教官が、清家教授と言っておられましたけども。教練の時間に防空壕堀を学生にさせておったんです。包帯をちょうどしまして、今まで一生懸命働いたものが休憩で全く裸。外に出ました。そして外にいた人達。運命で、いろんなことに出会い、私かみしめておりますけども。どうでしょう、もう高熱、ものすごい熱ですから、皮膚がですね、あの細い注射器が入らないんですよ、焼け焦げて。そしてどろんこになってのたうちまわっている。若いですから敵愾心に燃える、敵愾心に燃えてですね、「畜生」と言ってアメリカを罵ってみたり、お互いをちょうど励ましあって「岡本一、吉野一」と言って名前を。そうしますと先生は「婦長さん、ご家族が見つけて子供さんを見つけてみえるでしょう。そのとき分かるように、材料はあるだろう、焼けぼっくりの炭になったので、オカモトってカタカナで書いて、身体にこう逃げんように少し押し込んで」その作業をいたしました。

それから私はですね、また物理的療法科の自分の部下をですね。5人、その食料増産で浦上天主堂の下の運動場を各教室に仕切ってですね、もらってたんです、大学から。第11番目の、ですから第11医療隊と後でいうことになっているんです。0第11番目の教室だったんです。患者もいないし、警戒警報になったしということでですね。そこへお芋のつるの手入れに行った看護婦が行ってる。行ってどうしてもそこへ私どもが集まったところがないから、後で探そうと思って。そうしましたらどうなっていたかと言いますと、爆風である木綿の緋のもんぺをあの上下の服を着ていましたがちぎれてしまって、2ミリとか5ミリぐらいに首

とか足首とか腕とかいうところに巻きついて、誰が誰か見分けが付きません。仁王様のように髪はこんなして、煤のようなものが真っ黒く身体にもついて、もうほんと、そして太陽でカンカンと照られてました。

2日目でした。やっと見つけ出して、そこで、どうしましょう。「筵があるだろう、その筵で1人ずつ薬専の掘りかけの防空壕に運び込もうか」筵もただただこれでもできない。「婦長さん、メスがあるだろう。指をちょっと切ったらどうか、これもあるし」そんなこと私はできません。やっと焼こうということになったんです。はあ、どうして焼こうかなあと思ひよった。「キャンプファイアーをするだろう、1人ずつ離して母体を並べなさい」そして材料はいっぱいある。紙屑とかもういろんな薬のようなものが飛んできてあります。またそれを一体ずつかけます。「はい、準備が先生できました。火をつけてください」と私が言いました。「婦長さん、何を言うのですか、あなたの部下でしょう。あなたが火をつけなかったら、誰が火をつけるか」と言って、先生は全然私の言うことを聞いてくださいませんでした。私は22歳でした。自分だけ生き延びて申し訳ない、そういうふうな気持ちがもう胸いっぱい詰まって泣きました。「ごめんなさい、ごめんなさい」と言いながら火を付けました。ボンボンボンボン燃え上がるんです。しばらくお参りをしていました。「婦長さん、ここへいつまでもこうしてお参りしている時間はないですよ。今までのところにまた行って、負傷者の手当てをしていかなければ。もうとっぴり暮れた頃に燃えてしまってるから、そのときに来ましょう」とこうおっしゃる。私は泣きながら先生の後について、また救護活動にはいりました。

とっぴり暮れてからそこへ参りました。また教わるんです。「お骨を婦長さん、ここが一番大事だから。こここのところを三角巾があるでしょう」その三角巾を切って、メスで切ってそれで1人1人包んで。焼けぼっくりの炭になったので、「浜、吉田、井上」と言ってずっと書いて。私は布で作

った雑嚢を二つ持っていたんです、名ばかりの薬品と。それをもう一方にしまして、こっちの方に五体。「婦長さん、これはね、今薬専が掘りかけの防空壕で今夜お通夜をする。ご家族にご遺族に渡すまでは肌身離さず、どんなときでも」て、こう言われる。「はい」て。何度も私を揺り起こされるんです。先生は「婦長さんしっかりして。もういろいろいろいろ、うわ言を言われるから僕は眠れん。僕は眠れなかったら、明日の仕事に差支えます」こうおっしゃる。私は悲しくて「いいえ、眠ってなんかいません」と言うて、私はそう言います。そんなふうなことで、お渡しすることはできました。

まあ、そんなふうな状態であるのを思いますと、私はこれは3年ぐらいは生かしてもらえるのかなあ、生きられるのかなあと、思っておりましたが、今もう81歳を過ぎました。ほんとに夢のようです。あの惨状を思います時に、この歳まで生かしていただいてほんとにありがたい。婦長さん方はほとんど犠牲者になられました。医学部長様からご報告がございましたけれども、897名死亡ですね。その当時は890名とか言ったりしてたんですが。看護婦がそのうち108名ですね、これもだんだん増えてますけども、そういう犠牲者がでます。私はこの皆さんたちのこの犠牲者のおかげで、ほんとにこうやってこの歳まで生かされているんだと、その時からずーっと考えてきました。そしてこの二度とこういうことがないように、亡くなった人たちのことも忘れないように、感謝の気持ちを忘れないように、戦争がもう絶対にないように、平和がいつまでも続きますようにと言って、今、永井隆のご遺言を受け継いで、被爆直後から今日まで私なりにお仕事をさせてもらっております。

ここに若い学生さんがたくさん来てくださっておりますが、「もう絶対戦争がないように、世界中が平和でありますように」永井隆先生はおっしゃっておられました。長男の誠一、茅乃、お子さん2人、「戦争の話がでたら、1人になっても反対をするんだよ。戦争っていいことはないんだ。みんなと意見があわなければ、とことん話し合いを

しなさい。時間をかけてとことん話し合いをしなさい。ところがみんなそれぞれ人格があるんだ。交じ合わない点があるんだ。そのときには自分もそのお友達から認めてもらう。誠一、茅乃も友達のその大切な人格を大切に、認め合う、そうやって話し合いをしながらお付き合いをしていくんだよ」とこの如己堂に出入りをするもの、ここにいる者は愛の気持ちを、他人を大切に。愛、如己愛人て、聖書の言葉から先生が如己堂という名を付けられていますけども。その「愛を大切にするんだよ」そういうことで、この永井隆の如己堂はこのヴィセンシオ・パウロ会といって、カトリックの有志の皆様方が資財を持ち寄り大工さんもしながら建てていただいた。

それからもうひとつ、11医療隊のあの三ツ山のお話をすこし、後先になりましたけど、つけさせていただきます。ちょうどあの三ツ山ですね、飛び石が今のバイパスが通って、長与に行く方と短大に行く方ですね、あの分かれ道が三方橋があるんです。その三方橋でバスを降りますと、右の方にこう昔はジャンジャンジャン大きな飛び石があって、そこの飛び石伝いに来てました。そこには鉱泉が湧いてましたから。その鉱泉を毎日のように私は日課にして、両方にバケツにこう汲んで。永井先生はそこで深い傷を鉱泉で洗うのを楽しみにしておられたから。巡回診療をする前に先生はあつためてですね、こうしてやっておられた。

それで農作物を確保する部屋を作ってありました。そこの2階に私どもは十畳位を第11医療隊の寝泊りをする陣地にして。後はずうとですね、蚊帳をひいてるところを目標にして、虫やら蚊やら蠅が多くてですね、そこにみんなお座敷を三ツ山の皆さんのご家庭を提供して下さっております。そこに蚊帳をひいて収容をしておられました。蚊帳を目当てに行きますと、必ずおられますね。そのときに忘れきれない。一度だけ永井先生と大喧嘩をやったんです。今まで一生懸命ですね、皆さんのお世話をしてくださっておったカトリックの主婦の方がですね、放射能の影響が大体、そう

ですね、被爆から1週間、10日頃からはじめました。これが厄介ですから、核を使うな、持つなといろいろ言ってるんですが。その奥様がお布団の中におられて、立ち上がられて「永井先生、大変お世話様になりました。もうほんとご恩返しもできないで、私は天国に参ります」そして感謝の言葉を述べられた。即ですね、先生は「もうそうですか、天国っていいだろうな、白いバラが咲いて。僕もそのうち行くから、先に行ってらっしゃい」あっさりこうおっしゃるじゃありませんか。またそして私に向かって同じような感謝の言葉。私は命を大切に1人でも救うために、ほんとに朝越し、夜越しでこうやって一生懸命頑張っておられるこの永井先生が、もうほんとに憎くなってしまったんです。なんでこんなことを言う、死の宣告、今で言う死の宣告。私は粗末な看護の事績を、一生懸命ああでもないこうでもない、慰め勇気づけた気持ちでおりました。そうしますと先生はもう3mぐらいのところまでひっくり返って、私が行くのを待っておられた。「この婦長の馬鹿たれ！」と言って、もう、そう憎たらしい声で呼ばれる。「何ですか、先生こそ！」と私もそこで一生懸命大喧嘩をやったんです。

今、この歳になってあるいはもう40代になり、50代になり、私って本当に哀れな人間だったなあと。60代になり。そして60で私、看護部長を定年退職いたしました。もう退職したら何がなんでも、この二度とこういう戦争がないように、核実験がされんように、もう世界中が平和になるように。永井隆の平和を、平和を。これを受け継いで、永井隆のすべてをほんとに継承して、私は進もうと自分で決心し、それを実行してきたつもりでございます。そういうわけで、今、永井記念館の入場者が増え、そして市の方から新しく建て替えもしていただきました。立派になっております。如己の会もその退職後、翌年7月には立ち上げることができました。

今日はそういうことで、私は天国の永井隆先生といつもお話をさせてもらっておるんですけども。医学部の一年生の皆様方とこうやって貴重な

お時間をいただいて、永井隆の「戦争を絶対にしちゃいけない、ほんとにこの平和がいつまでも続きますように」ということを顕彰していただいたであろうと、大変今日は嬉しく思っております。天国の先生も喜んでくださると思います。今日はほんとに貴重なお時間を頂きまして、心から感謝と御礼を申し上げます。どうも有り難うございました。

ひさまつ
久松シソノ氏 プロフィール

1924年（大正13年）1月15日生まれ 81歳 長崎県出身

1941年（昭和16年） 長崎医科大学附属医院看護婦養成所卒業

1977年（昭和52年） 長崎大学医学部附属病院看護部長

1985年（昭和60年） 同 看護学同窓会会長

1986年（昭和61年）～現在

NPO法人長崎如己の会副会長

2003年（平成15年）～現在

永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター名誉センター長

【受賞歴】

1976年（昭和51年） 日本看護協会会長賞

2003年（平成15年） 長崎新聞文化章

2005年（平成17年） フローレンス・ナイチンゲール記章

【出版物】

『凜として看護』